経済倶楽部講演

特247
949

現時の世相に對する雑感

貴族院議員 大川平三郎君

—107—

昭和十年十二月十六日發行

0001332000

0001332-000

特２４７－９４９

経済倶楽部講演

東洋経済出版部

１０７

昭和１０

AAC

特247
949

帝國圖書館藏

現時の世相に對する雜感

貴族院議員　大川平三郎君

昭和一〇・六・一
帝國圖書館

經濟倶樂部講演第百七輯　目次

現時の世相に對する雜感

大川平三郎君

金解禁の樂屋話……一
私の反對論……三
郷・井上・團三氏の說服……四
反對論者は半可通……五
黃色人種をどうする……六
文明の盛衰……八
日本の外國崇拜……九
日本の自卑と支那の自尊……一一

目次

目次

支那とは提携が必要……一二
勢力を得れば跋扈する……一四
政黨政治の缺陷……一五
政黨跋扈の結果……一六
壓迫された薩州と長州……一七
非常時の効果……二〇
人の發明を眞似るの辯……二一
アダム・スミスも大したものぢやない……二三
亞米利加の保護論……二三
治外法權の撤廢……二四
紡績と製紙……二六
昔は生産今は消費が問題……二七

政府が統制するのは間違……二八
不滿足な日露の媾和條約……二九
ハリマンの滿鐵買收交渉……三一
京仁鐵道の買收……三三
私の宗教觀……三四
人智の及ばざるもの……三五
洪大なる神の營み……三六
宇宙の支配所……三九
神を恐れ敬ふ……四〇
機械力の濫用……四一
日本は最も好景氣……四三
圓の下落……四五

爲替の下落は變な譯だ……四七
石油はなくともよい……四九
五ヶ條の御誓文……五三
神祕的に偉い日本人……五三
西洋文明衰へ東洋文明興る……五四
三國干渉の回顧……五五
神の御加護……五六
君の爲めに命を捧ぐ……五八
日本の憲法……五九
非常時ではない……六一
必要な事業には補助を……六三
軍事費は惜まぬ……六四

仕事をする爲のインフレは惡くない……六五
良いインフレ、惡いインフレ……六七
金を後楯にしない通貨制度……六九
金で苦勞するのは愚だ……七〇
無駄は文明の進歩だ……七二

現時の世相に對する雜感

昭和十年九月十三日經濟倶樂部定例午餐會に於て

貴族院議員　大川平三郎君

金解禁の樂屋話

私が此方に參つてあなた方の前で講釋がましいことをすると云ふやうに間違つて戴いては甚だ困ります。私は明治四年に東京に出て參りましてから、約六十年間、本當に實業界で働いて居つたのであります。唯もう何事も考へないで、自分の專門の商賣々々と思つてやつて居りましたけれども、此間段々年が經つて、到頭六十年經過してしまひました。其跡を振り返つて見ますると是は洵に何でもないと思つてやつたことが、能く考へて見ると、なか〳〵さうでない。日本の國の發達にどう云ふ關係があつたかと云ふことが、實驗的に能く分る。そこで總てのことに就いて

長い間の經驗を應用して、色々なことを考へる。それが、抑々實際に遭遇しての事柄でありますから、相當に効果のあるものが出て來るのであります。書物で讀んでの理窟と自分の體驗で、是は斯うせねばならぬと考へる事實とは全く違ふ。

其内で段々順を追つて御話したいと思ひますが、最も著しい問題は金の解禁のことであります。當時内閣に經濟審議會と云ふものが出來まして二十人の會員が出來た。それは三菱、三井、住友其他各方面から二十人程、極く偉い方ばかり選ばれて出て來たのであります。其中に私のやうなものが、どうして選ばれて行きましたか、その理由はよく存じません。私は其時の總理大臣に向つて、あなた方が良い政治をしようと云ふならば實業界と本當に能く密接な關係を保つて、そして能く實業界の意見を聞いて、それに依つて政治をなさるが宜い、と云ふことを申したのであります。そんなことから貴樣も經濟審議會の一員にしてやらうと云ふので、選ばれたのかと思ひます。

そこで行つて色々御話を聞いて見ますると、金解禁と云ふことが非常に重要な問題であります。日本が是だけに發達したのであるから、どうしても金の輸出を禁止して居ることは、國家の恥辱

である。故に、もうやつても宜いであらうと思ふ、斯う云ふ話でありました。單純にさう云ふ漠として理窟の上から、此大事件が先づ決裁されると云ふ場合に相成つた。それは大變です。そんなことをしたらば、迚も此の日本の産業は立ち行かない。産業が立行かなければ、國家は段々貧弱に向つて行くことになる。實に恐るべき大事だと云つて、私は縷々事實を囚へて論じたのであります。

私の反對論

私の論據は先づ第一に、日本人は食物を輸入して居る。亞米利加から粉を買つて居る、麥を買つて居る。日本の粉と云ふものは、皆亞米利加から來るので、此粉の輸入が其當時六七千萬圓あつた。殆ど大部分輸入して居る。唯今一年に一億以上の金を拂つて居る、紙ばかりでも一年に四五千萬圓金を拂つて居る。自分の關係をして居る商賣の上から見ても、若し金解禁になつたならば、どうなるであらうと考へて見ると、實に大變なことで、到底やつて行けるものでない。

こう云ふ事實を囚へて、其事實の上から私は立論をして金解禁は時期尚早である。少くとも日

本は先づ麥に相當の課税をして、日本の畑で取れるやうにしなければならぬ。それから鐵の如きも、丁度是だけになつて居れば、後はさう骨が折れないであらうから相當な例へば一噸に對して二十五圓でも課税をして、さうして此事業を發達させる。鐵も買はないで濟む、麥も買はないで濟む、どうやら間に合ふと云ふやうなことになつた時に、解禁をしても遲くないであらう。斯う云ふ議論です。然し、どう私が聲を嗄して議論をしても二十人の中で金解禁反對論者は私一人だけですからどうにも成りませぬ。

郷・井上・團三氏の説服

そこで其時議長をやつて居つた郷君が、斯うやつて十九人が口を揃へて賛成をして居るのに、お前一人が反對しても仕方がない。どうかもう議論は兎に角止めて貰ひたい、と云ふ。そこでさう云はれると、私一人が威張つて居ても仕方がないから、それではそれで宜しうございませうと云つて置きました。

其後内閣が送りまして、井上さんが僕に向つて云はれるには、お前の説は尤もだけれども、是

は關税に依つてどうでも押へ方があると思ふ。それで此問題は金解禁を實行すると共に、關税に依つて、お前の云ふ通りになるやうに仕向けてやるから、さう思つて呉れ、と云はれた。

是は工業倶樂部の食堂でありましたが、そこに團さんが居られて、證人になられた。井上さんは、必ずどん〳〵關税の改正をして、お前の云ふやうに國の惱みを生じないやうにするから、先づさう思つて呉れと云ふことでした。團さんの證人は後から考へると不思議なことであります。

反對論者は半可通

所で、金解禁をやつて見ると、御承知の通りどうにも斯うにもならぬやうな狀態になつて了つた。そこで非常に驚いて、色々井上さんの所に苦情を持込んで見ましたけれども、井上さんもなか〳〵云ふことを聞かない。私は再び金の輸出を禁止してしまふ方が宜い、と云ふ説を盛に持出したものであります。

或る時、星ヶ岡茶寮に井上さんの御出でを請ふて、根津君、藤原銀次郎君其他約二十人ばかりでしたが、我々で井上さんを招んで盛に包圍攻撃をしたのであります。其時に井上さん曰く、兎

に角あなた方は先づ半可通だ。私が一番此問題を能く知つて居るのですから、先づ私の云ふことを聞いて貰ひたい。見て居て貰ひたい。斯う云ふ言葉でありました。向ふがどうもさう云ふことを云ひ張るのでどうすることも出來ませぬから、皆仕方がないと云つて、其時は諦めた。所が井上さんも團さんも到頭あゝ云ふ禍に罹られた。是は如何にも奇しき因緣と思はれます。

金解禁についてのお話は、此の位にしておきまして、次に一つ黃色人種の立場をどうみたらよいか考へてみませう。

黃色人種をどうする

さて、維新以來日本の文明が着々として進んで來た。而して、友邦の支那は依然としてまだ眠りが醒めない。一體支那全體の國情が甚だ進まない。日本はどん〳〵進んで行つた。同じ東洋にあり乍ら一體是はどう云ふ譯で、支那はあゝ云ふやうに遲れて居つて、日本は斯樣に進んだのであらうかと云ふことを、どうしても考察して見なければならぬ。今日此東洋では、全く白皙人種と黃色人種の爭である。玆に於てどうしても或る解決を付けて置かねばならぬ形勢になつて居ると思ふ。つまり人種の爭である。

もう歐洲も米國も殆ど自分の國では色々なことをなし盡して仕舞つて、是からの仕事は東洋である。東洋に於て白皙人種が大いに働かうと思ふのに、妨害になるのは日本であるから、先づ以て日本の勢力を殺がなければならぬと云ふ事、是が彼等—と云つては失敬か知らぬけれども、彼等が非常に研究中である所のものである。軍備縮少と云ふもの〻目的は何處にあるかと云ふと、あれはどうしても日本が滿洲若くは支那に手を伸ばすことが出來ないやうに、日本の力を制肘する爲に出來て居る軍備縮少論であります。決して外のことぢやない。滿洲や支那に手を着けさせないやうにしようと云ふのが軍備縮少の本體だと私は考へる。

斯樣にして今は日本はどうしても先づ東洋の先覺國として、此際日本許りと云ふことではなしに、黃色人種を一體どうしたら宜からうか、之を考へなくちやならぬ。日本のことも大切ではありますけれども、同時に大體黃色人種をどうしたら宜からうかと云ふことを考へるべき時であらうと思ひます。

文明の盛衰

そこで物は總て造化の妙で、或るものが非常に發達すると其發達の極度と云ふものはどうかと云ふと、人心が弛緩して、そこで文明も衰へる。大いに發達した文明も遂に自然自然に消滅してしまふと云ふ實例が羅馬に於ても、古代の埃及に於ても、瞭かに認められるのであります。盛になると人心は安心をし、慢心をして、さうして直に風儀が紊れる。其事は明白に歴史が我々に敎へて居る。

そこで歐羅巴の文明、特に英國の如きは、非常に發達して、其結果、頗る人心が衰へて居ると云ふことは、ハツキリと色々な工業上に見えて居る。特に私は時々英國へ行つて、英國の製紙事業を研究して見たが、英國に於てはもう殆ど我々が感心だと思つて見るに足るべきものがない。舊式な、不便な厄介極まるものを、依然として俺の國でやるとだから宜いと思つて居る。

私が英國を歩いて、向ふの製紙工場に、斯う云ふことがあるのに、何故あなた方は之を採用しないかと云ふと、十分之で用が足りる、成るべく餘計なことをする必要はないと云ふ。此自尊主義と云ふものが英國の進歩を止めて居る、そこで自尊主義、自尊と云ふことは、どう云ふことだと云ふと慢心である。慢心と云ふものは、發達した結果どうも起り易いものであつて、英國がその實例である。

日本の外國崇拜

そこで尙ほ立歸つて維新當時のことを考へると、日本は不思議に堪へない。先づ自分を非常に卑しいものである、洵に知識の足らぬ、詰らぬ國民であると自分自身を考へた、維新當時の人達の頭を能く調べて見ると、西洋人をどう見て居つたか、たゞもう赤い毛さへ生えて居れば、どんなことでも出來る位に外國人を見て居つた。エライ外國崇拜であつた。情無い始末でありますが今から五十年前の狀態を考へると、實にあさましいものであつた。

横濱で外國人のことを旦那と云ふ。それから横濱の原とか、茂木とか、あゝ云ふ立派な横濱一流の商賣人が、外國人の商館の主人のことを旦那と云つた。そこで商賣をするのに店へ行つて西洋人と同等に立會つて話をすることが出來ない。商館番頭と云つて一種の番頭があつて、それが

店の入口に控へて居つて、西洋の店であるのに、日本流に座布團を布いて帳場格子を置いて、そこに坐り込んで居る番頭と云ふものがあつた。其番頭を相手に色々な引合をする實に戰々兢々とした狀態で取引をした。

斯樣な狀態で外國人を崇拜することは非常なもので、詰り赤い毛の生えたやつは、我々より何でも偉いと思つた。其一例を申すと云ふと、王子製紙會社に私が這入つて仕事をして見ると云ふと、其處に外國人の技師が居たが運轉を始めてから、二月も紙が機械の間から出て來ない。始末にいかない。そこで澁澤さんの所へ夜行つて報告をすると云ふと、どうも實に困つたものだ、どうしたら宜いだらうと云ふやうなことであつた。

是ぢや仕方がないから、自分で一生懸命に書物を搜して讀み、それをするにも實に此額から汗が出るやうな氣持で始終勉强して、私が居なければ紙が出來ないと云ふやうになつた。其西洋人は到頭まだ雇入れの期間中に暇を出しました。尤も其先生が不完全であつたと云ふことが私共をして又幾らか腕を磨かせた一つの原因になつたと考へなければならぬのですが、後で段々調べて見ると、紙抄きのことなど知つて居やしない。赤い毛が生えて居ると何でも出來ると思つた時代です。又實例を申しますと、明治の初、即ち明治五六年時分に彼方此方に學校が出來ましたが、其學校にはどんな學校でも必ず一人二人の赤の毛の敎師が居つた。赤い毛の生えたやつが敎師に居らなければ生徒は來なかつた。其位に外國崇拜がヒドかつた。

日本の自卑と支那の自尊

今日の支那などに行つて色色考へて見ると、日本人は、自らを卑しく考へ、さうして外國人を非常に崇拜したと云ふことは、どうか彼等に就て成るべく一生懸命に學ばうと云ふ心に皆なつた、と云ふ事であります。今から云へば、赤い毛の生えたやつは何でも出來ると思つて信用して崇拜したのは非常におかしい。おかしいに相違ないけれども、其位に外國人を崇拜したものですから是非之に就て學ばう、彼等に學ばうと云ふ氣に國民が一齊に向つたのであります。國民が皆さう云ふ氣分になつて、一生懸命に外國の文明、外國の施設、外國の知識と云ふものを此方に取り入れようと云ふことに、一意專心に、競つてそれに向つたのであります。其爲に日本の文明は早く進んだ。それでありますから、自ら卑しくすると云ふこともいけませぬけれども、併し、自尊と

云ふこと位人間の生涯を傷けるものはない。國家の發達を傷けるものはないのであります。餘程能く之を考へなければならぬのであります。

そこで支那が何故に遲れて今日のやうなことになつたかと申すと、俺の國は偉いと云ふ考が、支那の頭から取れない。そこでまだ今日でも本當に心から其氣にならぬのであります。自ら其國を中華と稱して、東洋の中華ぢやない、世界の中華と思つて居る。さう云ふ風に自尊心が非常に猛烈である爲に、自らを捨てゝ、他の知識を取入れようと云ふ氣にどうしてもならぬ。それが遂に今日の支那をして、文明の發達が遲れ、それが爲に殆ど見る影もないやうな渾沌たる狀態に陷つて居るのでありますが、考へて見ると洵に恐ろしいことである。

支那とは提携が必要

それから私が最も感慨を深くする事柄が一つあります。それは今私共の考へでは、どうしても日支親善でなければならぬ、支那と爭はないで提携をして行く。さうして矢張り東洋では、黃色人種！黃色人種と云ふ名稱はいやですが英語でカラードと云ふ。カラードと云ふと黑ん坊のことで甚だ見るのもいやなやうな氣分がしますし、殊に今のエチオピアなど、あれもカラード、そこで日本も白くない、きいろい色が付いて居るから、カラードの內であらうと思ふ。

兎に角黃色の我々は支那と提携をして、白皙人種と對抗すると云ふ方法を講じて行かなければならぬかと思ふのであります。

支那が自尊心の爲に發達が遲れて、今日のやうな狀態になつたと云ふことは、永久に取返しの付かない所の支那の失敗であり、過ちであつた。日本は幸ひに先きに進んで來た。同じ亞細亞にあつて、仕事をして行く場合に於て、支那の今日の立遲れと云ふものは、回復の出來るものでない故に我々は何とかして、彼を押潰さうとは思はないで、能く發達せしめるやうに、彼を能く導くやうにし、握手をして支那と共に進むと云ふことに、擧國一致で進まなければならぬと思ふ。

動もすれば今の支那の境遇を見て、あれを組し易しと見て、壓迫でも加へようと云ふ考になるのは、間違ひであらうと思ふのであります。國が大きくなると云ふことも宜しいのでありますけれども、餘り急激にエライ發達をすると云ふことは、決して國家の爲に幸ひとは申されない。先づ今の滿洲位のものがちやんと手に這入つたらば、斷然とあの區域を守つて、能く支那との間に

諒解をするやうに進まなければならぬと思ふのであります。

勢力を得れば跋扈する

是が又餘り勢に乘じて伸びて行くと、其間に過ちが起つて來る。なか〳〵そんなことを云ふのもいやでありますけれども、今の日本としは、茲に最も恐るべきことは軍部の跋扈と云ふことであります。

素より、日本はどうしても武力に依つて行かなければ立たぬ國であります。併し、軍部問題—次いで赤字公債と云ふやうな問題が考へられるのでありますけれども—勢力を得たものは、どうしても跋扈する。其跋扈する爲に色々な過ちをする。是が爲に國に禍をするのであります。そこで政黨が勢力を得ると、政黨が跋扈することになる。今の人間の政治をどうしたら宜からうと云ふことになると、どうしても本當を云つたならば、代議政體より良いものはないのであります。それでありますから、制度としては代議政體を守り立てゝ行くと云ふことより外に、先づ良い制度はない。如何なる哲學者と雖もまあ政治と云ふものは代議政治に求めるよりないと云つてゐる

のであります。或はさうでせう。

政黨政治の缺陷

併し、之に對して此代議政體の大缺點が第一あると云ふことは、百人と百一人と二つの政黨が出來て、一方の百人は右、一方の百一人は左と云ふと、一人の爲に左へ行かなくちやならぬ。それは甚だしい間違ひで、所謂衆愚の力を以て少數を壓するのであつて、尙ほ語を換へて云ふと、弱肉强食と云ふことであります。此弱肉强食を本體として居る所の今の代議政治と云ふものが、完全でないと云ふことははつきり明かなんであります此位惡いことはないのであります。

其上に政黨が勢力を得て政治を執ると云ふと、そこにまあ種々樣々な利權屋と云ふものが起つて來て、國の色々な政治を汚毒するのであります。

現在私共は樺太に行つて紙抄きの事業をやつてゐるが、樺太は遠い所で北の方で餘り人の來ない所であります。此政治と云ふものはどうも紊れ易い。政黨政治であると、長官が度々迭る。迭る度に色々な人が來ては山林の拂下をする。到頭山林は濫伐をしてしまつたのです。是等は政黨

政治の惡い所を歴々として認めざるを得ない。私共が色々と其實跡の上から政黨の非を擧げることは愼しむべきかも知れませぬが、事實の上から私共は話を聞くより、自分でやられるので、一番應える。あんな政治ぢやしようがない。

政黨跋扈の結果

それで曾つて山本悌次郎氏に私は斯う云ふことを云つたことがある。どうも政治家と云ふものの間には利權屋がある。私利私權を目的として政治に終始奔走して居ると云ふ輩がどうも多いやうに私は思ふのだけれども、是ぢやどうも困るぢやありませぬか。いやそれはお前の云ふ通りである。云ふ通りだけれども、そんならと云つて、之を本當にやかましく云つたならば、政黨に這入るやつはない。所謂水清くして魚住まずの類であります。それでありますから政黨と云ふものも、どうも理屈の上からは宜いやうではありますけれども、弱肉强食即ち多數を以て少數をば壓迫すると云ふことを根本として出來て居る政黨でありますからこれはいけない。さうして段段蔓つて來ると、政治が斷然見るに堪へないやうに腐敗するのであります。

其結果が此間の總理大臣で一大不祥事に遭遇された犬養翁の如きものであつて、全く此政黨跋扈の結果であつた。犬養さん御自身に於いては決してさう云ふことはないので、政黨全體の過ちと云ふものを一人で御背負ひになつた方と思ふ。あの事以來大いに政黨の弊害は矯められたと思ふ。而して其點は洵に缺點でありますけれども、尙ほ玆に於て是から軍人が餘り勢力を得て輕擧妄動すると云ふことのないやうにして貰はなければならぬ。これは軍人の爲めにもどう云ふ風にしたらば宜しいか。是は私はあなた方と我々が一緒になつて考へて、解決を計らなければならぬと存じます。誰でも頭を擡げれば惡いことをするに決まつて居るから困るのであります。押へ付けられゝば、押へ付けられたやつは必ず反撥力を起して發達すると云ふことになる。そこで維新の大業が成立つたのも、矢張り其理屈から來て居るのであります。

壓迫された薩州と長州

御承知の通り薩州と長州は幕府から非常に憎まれて居た、機會だにあつたら、亡ぼしてしまはうと考へられて居たのであります。薩摩では幕府の隱密が這入れば必ず殺してしまふ。少し疑は

しい商賣人でも來たとなると、どつかでなくなつてしまふ。其位に注意をして、幕府に際を窺はれないやうにして來たのであります。其爲に一番大切なことは何かと云ふと、先づ士氣を大いに振ふやうにしなければならぬ。殿樣が御妾騷動などして居られないと云ふ次第でありますので、殿樣もなか〳〵歴代名君が居られたのであります。左樣に幕府から壓迫されて居つた薩摩が、一日も油斷が出來ないと云ふので盛に士氣を練つた。文武兩道に對して出來るだけの力を盡した。殊に外國と秘密に交通をして、硝子を作るとか、大砲を吹くとか云ふやうなことまで、盛に國主自身が奔走されてやられた形跡がある。

此幕府に對抗して壓迫された鹿兒島が、遂に此維新の根本をなしたのである。又大いに幕府に始終親はれて居つた所の長州、此薩摩が提携をして維新の大業が出來たのである。能く西洋の文明史にも書いてあるが、どうしても國の發達と云ふものは、强國が互に境を接して居る時に御互にやられないやうに用心をして武を練り非常に勉强をするので、其國が發達すると云ふやうなことが能く書いてありますけれども、其通りである。是が爲に薩摩と長州とが一致して維新の大業を安々となし遂げたのです。だから壓迫をされると、一生懸命に研究をすると云ふ立場になる玆

に國民の一つの面白味がある。

薩州が偉かつたことは、維新の際に幕府へ幾ら話しても果しがないと云ふので、何でも鹿兒島へ行つて色々英國が條約を結んで居る。そんなことをして居る內に生麥事件と云ふのがあつた。薩州に島津三郎と云ふ人があつて、生麥を通る時に外國人が行列を突つ切つたのを、捉へてそれを斬つちやつた。それで、幕府に色々なことを申込んだ所が何にも効能がない。それで鹿兒島に軍艦を持つて來て攻めた。其時に大砲の射ち合ひをした。所で大砲を盛に吹くと云ふことも知つて居た。砲臺も要所々々にちやんと出來て居つた。維新の際にあれを急拵へにしたのでなくして前から幕府に對抗する策として砲臺が出來て居つたに違ひない。それを能く知らないで、外國人がやつて來て、彼處で偉い目に會つちやつた。英國の艦隊の艦長だか副艦長だかが到頭彼處で戰死したのであります。それで這ふ〳〵の態で逃げた。そんな位な偉いことをするやうに鹿兒島はなつて居たのですから、其力を以て倒幕の功を奏した譯です。

詰り矢張り段々と私共も考へて見ると云ふと、方々から壓迫され、苛められて居ると云ふ境遇にある國の方が、人心が油斷をしない。商賣の上でもさうではないかと思ひます。是が發展する

一つの動機になる。大いに考ふべき所であります。

非常時の効果

最近どなたも日本を非常時だと云ふ。成る程非常時に違ひない。兎に角東洋に於て外國人が支那や何かを勝手にしようと思ふのに、邪魔になるのが日本である。どうしても日本を發達させてはならぬと云つて、我々は油斷をすることが出來ない立場にあるのでありますから、丁度鹿兒島が幕府に睨まれて、さうして不斷の研究を物事に對してしたと同じ様な狀態であります。外國から睨まれるのでは、日本は軍備を怠る譯に行かない、單に軍備ばかりではない。工藝、美術、總てに付て一切油斷が出來ない狀態にある。是が即ち非常時と云ふのである、此非常時と云ふのは決して一時ではありませぬ。殆ど永久的な非常時である。非常時は困つたものだとあなた方は御考へになつては困る。是あるが故に日本は奮發力を常に維持して居るのでありますから最も面白いと思ふ。

人の發明を眞似るの辯

文明の輸入と云ふことも、詰り何でもかでも日本人は人眞似をする、眞似の巧い國民だ、斯う云つて、卑しむ氣味がある。

併し、物の利害を考へて見ると云ふと、自分で發明することは大變だが、人の發明を眞似することは何でもない。發明などと云ふやうな厄介なことは、人にして貰つて置いて、直ぐ眞似てしまへば結構だ。眞似することを卑しいとか、馬鹿々々しいと云ふのは是は餘計な考だ。そんなことを云ふ必要はない。何でも眞似るだけはどん〳〵眞似てしまつて、愈々眞似る種が盡きたら、今度は自分で考へる。是が本當だ。

そこで私は紙抄工場に居つて、家の者に言付けて置きます。一生懸命發明をしよう、新しい工夫をしようと考へることは止して呉れ。考へても愈々本當にするには、偉い金の掛ることが起るから、それよりも先づ以て始終外國の、獨逸とか佛蘭西とか、英吉利とか、亞米利加とか、外國のあらゆる我々の事業に關する文献と云ふものを殘らず眼を通して、それを見て、盡く採るべき

ものは採り、出來ないものはやらない。自分が新しい工夫をする必要はない。

世界中の人が今ちよつと良い工夫を一つやると云ふと、それで飯が食つて行ける。巧く行くと云ふと、ちよつとしたことでも金儲が出來る。

近頃大きいのはマルコニーと云ふ人の無線電信、或は亞米利加のパテントの例を云ふと、ヒルのテレフオン、電話機と云ふもので儲けた金は大變なものである。そんな例がありますけれども我々は世界中の人が皆頭を絞つて考へるのだから、其考へたことを始終拜見をすると云ふことを考へて居れば、それで宜いのだと思つて居る。どうも是が一番悧巧な立廻りだと思ふ。

アダム・スミスも大したものぢやない

それで私は横濱に行きまして、西洋人が非常に威張つて日本人を隨分足蹴にすると云ふやうなことを見て、非常に憤慨して居つた。何故に西洋人はあゝ云ふ風に勢力があつて、金持で、悧巧で、さうして威張つて居るか知らぬが、日本人は何故に左樣に劣れるものであらうかと云ふことを考へなくちやならぬと思つて非常に考へた。是は彼奴等が金をうんと持つて居るからだ是は大いに富まなければならぬと云ふので、色々本屋を捜して、私はアダム・スミスのウエルス・オヴ・ネーションズ(國富論)と云ふのを捜し出して來て、全部すつかり研究した。

さうすると是は盛に自由貿易を說いて居る。玆に於て、私は此アダム・スミスと云ふ先生も大したものぢやないと思つた。どう云ふ譯かと云ふと、英吉利は盛に工藝美術が發達して居る。日本は何も知らない。知らないやつと、知つて居るやつと立向つた時にどうしたつて、向ふで拵へる方が安く出來る。

我々は始終百姓ばかりでお蠶をして、何でも外國から頂戴して行かなくちやならぬ。それでは國の發達する譯はない。どうしても苟くも國に材料があり、發達すべき性質のある事業は何處までも保護して、國でやらせるやうにしなければいけないと思つた。だからアダム・スミスでは日本は駄目だ、斯う云ふことを考へた。私が十八歳の時であります。

亞米利加の保護論

そこで亞米利加へ行つて見ると、亞米利加にはケーレンと云ふ非常な有名な學者でありますが

猛烈な保護論をやつて居る。亞米利加は保護に依つて發達したが、どうも英國が色々なものを持つて來て邪魔をされる。母國と商賣上の關係を斷つ爲には、大西洋が水の代りに火の山であつたらば、亞米利加はもつと發達したであらうと云つて居る。

そこで何でも學者と云ふものは、學者癖と云ふものがあつて、保護論を云ふと、何もかも保護論で通す。自由交通論なら何もかも自由交通論で行かうとする。こんな馬鹿な話はないと思ふ。先づ保護すべき性質のものは能く研究して保護し、それから自由にしなければならぬ性質のものは其積りで自由にして行く。其間の緩急宜しきを得べき政策を論ずるものが、即ち經濟學でなければならぬのであります。それを一方に依つて物を考へて行つて、ジエネラリーゼーション〳〵と云ふのは、大變な間違ひであると私は考へた。爾來其原理で何もかも私は考へて居りますが、あなた方にもそれはお前の云ふ通りだ、と云つて戴けると思つて居ります。

治外法權の撤廢

日本には昔治外法權と云ふことがありました。外國人が日本に居住して居つても、彼等は日本の法律には服從しない。さうして外國人と訴訟が起れば、其國の領事館に訴へて裁判を受ける。英國人と訴訟を起して、英國の裁判所即ち英國の領事館に訴へて出たつて、日本人が勝つ氣遣ひはない。さう云ふ不都合な時代があつた。是は治外法權と云ふ、英語で云ふとエキストラテリトリーと云ふ。

それから其當時日本の關稅が平均約五分であつた。五分の關稅と云ふことでは、實に關稅保護と云ふ役にも何にもならぬのであるから、關稅をせめて一割五分にして貰ひたいと云ふことを、頻りに私共は運動をしたことがある。其時分に一方には治外法權を此儘置くと云ふことは國家の恥辱だ。日本の領土に居住して居る外國人が日本の法律に從はないと云ふことはない。是はどうしても撤回して貰はなくちやならぬ。斯う云ふことになつた。

所が國內の議論が二つに分れた。我々はまあ法律や何ぞはどうでも宜い。どうかして關稅をうんと掛けるやうにして貰ひたい。國の產業の發達を先きに努めなければいかぬと云ふので、頻りに私共は關稅の方を重んじて議論をして居つた。そこで結局、どうもさうかと云ふので、澁澤老人なども矢張り私共の說で、一緒に色々と運動をして呉れたのであります。

所が大隈さんが外務省のことをやつて居つたのですが、我々の說になると云ふことに決定をすると、間もなく來島恒喜と云ふ人に、大隈さんは爆彈を拋り付けられて、片脚を到頭碎いちやつた。そこで其一學生が生命を掛けて出した建白が到頭功を奏して、治外法權が撤廢に相成つたのであります。其大隈さんを殺さうと思つた學生は、直ぐに自分で自殺をしたのであります。そこで今の人も時々さう云ふことをして吳れるのは宜いが、生きて居て裁判など受けて居るのは、どうも意氣が足らぬと私は思ふ。

紡績と製紙

私はさうして其時分に、色々經濟學なども研究して、どう云ふことを考へたかと云ふと、先づ自分も一代大いに働かなくちやならぬが、どう云ふことに從事したら宜いだらう。それから色々書物を讀んで見ると、アダム・スミスなどには色々な工業論が書いてある。日本は皆國民が木綿の着物を着て居る。お婆さんが車をぶん〳〵廻して絲を引つ張り出して居る。是は紡績工業が日本では一番發達するであらうから、紡績に一つ變更しよう。其時に製紙事業を三年やつて居た。

此三年の製紙事業の研究を捨てるのは損だ、是は寧ろそれよりか自分の兄弟の內に此紡績の仕事をやらせようと思つて、到頭兄貴を取捉へて、紡績業者にして、是は終始紡績業で終りました。私はずつと紙の仕事で今日まで通して來た。」

昔は生產今は消費が問題

此間、國の發達する場合と云ふものはおかしいもので、どん〳〵盛に如何にも間斷なく工場を擴張して來て、それで少しも販路に差支へがなくて、今日まで都合好く出來たのです。けれども是は國家の發達する時ですから、丁度國家の發達するのと自分の生產を殖やすのと一緒になりますから、販路の心配と云ふものはない。今までの間は紡績事業でも何でも大概の日本の產業と云ふものは產業の進んで行く力と、それから國家の進むのと同じやうな足取で行つたものですから消費と云ふものも大切ではあるが、寧ろ生產の方が大問題であつた。

所が、今日では生產の方はもう段々我々の力が付いた。學問も進み、相當な人材も出來て來て生產と云ふものに對して大した苦心はない。今度は消費と云ふ方が、販路の方がむづかしくなつ

た。生産と販路とくつ付く樣にして置かなければ商賣は出來ない。生産と云ふものが餘つても困るし、不足でも困る。さればと云つて生産と販路と兩方を常に一致せしめると云ふとはむづかしいのであります。玆に於て商賣なるものは非常にむづかしいことになつて來た。

そこで支那の幾億萬の民衆が消費する所のものを、供給する立場に立つことが、最も大切なことなんであります、生産それ自身と消費とは殆ど同一の價値のものである。それ故に米國や英國が支那の商賣を大切に思つて、日本の進出を非常に憂ふる所以はそこにあるのであります。それで私はさう云ふ考からどうも消費と云ふとを大切に考へて、是が詰り統制と云ふ考へになつて來る。競爭しちや迚も今日商賣にならない。

政府が統制するのは間違

今の世の中では、どんな商賣でも競爭のない商賣と云ふものはない。競爭をして御互に儲かることの出來ないやうな狀態に陷つて居る。それを防ぐ爲には統制と云ふことが必要である。併し統制と云ふことは、亞米利加などに行きますと、禁止して居ります。今から三十年も前にシエルマンと云ふ人が議會へ出した法律でシエルマンローと稱へるアンチ・トラスト・ローがありまして、商賣人が寄合つて事業統制を圖つて價格を維持すると云ふことは、亞米利加では絶對に禁止して居る。

それを日本では合理局などと云ふものを拵へて、政府が先きに立つて進んで行くと云ふのは、おかしな感じがする。どうも人間の俐巧と馬鹿の境がそこにあるやうな氣がする。政府が統制に乘出して來ると云ふのはどうも間違ひだ。當業者自身で統制したら宜い。それを政府が物の値を高くするやうなことに世話を燒くのは、どうも間違ひだと思ふ。私も生産業者であつて、生産を業にして居るものがそんなことを云ふのは、少しおかしいやうだが、事實私はさう感ずるから云ふのです。

不滿足な日露の媾和條約

日露戰爭の時に、もう日本の力が盡きて、奉天を攻擊した時分の日本の心配と云ふものは、容易なものぢやなかつた。敵の逃げるやつを射つのに彈丸がなかつた。奉天の時には、彈丸があれ

ば、全部皆殺しに出來たのださうです。さう云ふ彈丸がないと云ふ困つた時代に、平和條約することは、洵に結構なことである。それがまだ戰ふ餘力を持つて居つての平和條約ならば、それは大いに易いことであるけれども、もう駄目だと云ふ報告を受けつゝポーツマツでウイツテと談判した。ルーズベルトが非常に心配をした。

私は能く亞米利加の事情を知つて居るのであります。どうしてもあの日本海の戰爭をしちやいかぬ。あれで若し負けたらどうする。どうしても立つことは出來ないのであるからして、先づ戰爭をしないで平和條約をしろと云ふのがルーズベルトの心配である。色々に說いたのですけれども、日本の海軍は斷乎として聞かなかつた。それは勝算があつたからでありませう。平和條約をする時になつて、小村さんが非常に困つたのは、あの當時戰爭を長く續けることが出來ない狀態であつて、到頭樺太もあの長い島を半分五十度で仕切つて、此方を取ると云ふ位だつた。若し此方に力が本當にあれば、樺太は全部無論此方で取つた。

講和の交涉が不成立になりさうで、外交官が旅裝を整へて歸國をすると云ふやうなことになつたこともあつた。それを又呼び戻されて話をして、到頭あの平和條約が成立つたのであります。そして樺太を半分此方に取り、關東州を取り、滿鐵を取ることにして歸つて來た。

ハリマンの滿鐵買收交涉

まだ小村さんが亞米利加へ行つて平和の談判して居る最中に、亞米利加の鐵道王ハリマンと云ふものが、日本にやつて來て、南滿鐵道が日本の手に這入る。あれを自分の手に買ひたいと云つた。

ハリマンと云ふ人は脊の小さい人で、脊髓病で立つことが出來ない。眞直に立てない、針金で拵へたコルセットを嵌めて漸く歩いて居つたが、なか〳〵偉い奴で、自分の線路で世界一周が出來る交通路を拵へたいと云ふのが彼のアンビションだつた。さう云ふ大希望を持つて居る。脊髓病で餘命久しからざるのに、意氣壯なりと云ふべきで、日本へやつて來て、帝國ホテルに泊つて其時の內閣總理大臣は桂さんだと思ふが、桂さんを盛に說いて、到頭二億圓で鐵道を買ふ約束をしちやつた。それに判を捺した。それで成功した積りで自分はパシフイツクメールのコレヤ號と云ふ船で亞米利加に歸つた。

行違ひに小村さんが歸つて來て、鐵道を賣つたと云ふことを聞いて、非常に憤慨して、それは大變だ、十七萬人の生命を傷けて取つた鐵道を、ハリマンに賣つたら、大陸に日本の手足を伸ばすことは出來ない。そんなことは到底出來ないと云ふので、匕首を懐にして、閣議に臨んで破談を主張した。容易ならざる見幕である。刺違へないばかりの勢でやつた。

それでハリマンと契約をキヤンセル出來ないが、契約の内に此事をすつかり執行するには支那政府の同意を勿論要すると云ふことが書いてあります。それで此方から支那政府に八百長に賴み込んで、不賛成を唱へて貰つて壞したのであります。小村さんと云ふ偉い方が其當時日本にあつたのが日本の永久の幸となつたのであります。若し其時に滿鐵を亞米利加人に取られて御覽なさい。全然どうにも斯うにもならぬことになつた。それでハリマンと云ふ男はそれ以來日本人をまるで惡魔の如く云つて居りました。デーン・ジヤパニーズ、日本人の上にデーンと云ふ字が付く鬼畜の如く云つて到頭死にました。

京仁鐵道の買收

それからも一つ話したいのは、私が明治十七年に歐羅巴からずつと廻つて亞米利加に來ると、亞米利加のトレーディング・カンパニーのモールスと云ふ人が大院君に非常に可愛がられて、仁川から京城までの鐵道の許可を取つた。漢江の橋の設計まですつかり濟んで、亞米利加へ金を拵へに行つたが、東洋の風雲はどうなるか分らぬ、そんなものに金は出せないと云ふので、亞米利加で金が出來ないととなつて、非常に困つた。

所へ私が歐羅巴から亞米利加に廻つた時に、非常に私を能く可愛がつて呉れた人が、斯う云ふことになつて居るが、日本で是をなんとかして、此權利を買つて貰ふやうにして呉れる工夫はないかと云ふ話です。それで一つ急いで歸つてやらうと云ふので、大急ぎで歸つて來て、澁澤さんに御話しました。

それから大隈さん其他の方方を一緒に歴訪して、到頭八十五萬圓で線路の權利を買ふことになつた。それが今の京仁鐵道です。京城と仁川の間の連絡線です。そればかりではいけないと云ふので、も一つ線路を拵へようと云ふので拵へたのが今の釜山と京城の線であります。此仁川の鐵道を巧く日本の手に取つて置きましたので、日清戰爭が能く出來た。若しそれがなかつたならば

日清戰爭は起らなかつたかも知れない。手の着けようがない。

この爲に日清戰爭が首尾良く出來たと云ふことになると詰らぬことが國家の發展の上に妙な効果を奏したと云ふことになります。

私の宗教觀

次に、是は時事問題ぢやないのだから、餘談になりますが、私の頭の內に持つて居ります事柄で、最も大切なことですから、一つ聞いて戴きたいと思ひます。それは私の所謂宗教觀念であります。私は日常の仕事をしますに就ても、又世の中の總てのことを見るに就ても、此自分の宗教觀念に照して、果して是が良いものであらうか、惡いものであらうか、自然の結果であらうか、それとも所謂神意であらうか、と云ふやうな點から、種々考へて居るのであります。

そこであなた方は私を捉へてどうもあれは無神論者であるであらう、宗教觀念はあるまいと見て居らつしやりやしないかと思ふのであります。ところが然らずして、私は極端な有神論者であります。さうすると、どうもあれが柄にないことを云ふと思つて、あなた方は冷笑なさるかも知

れませぬが、本當に嚴正にそれを考へて、それを私は守つて居るのであります。この自分の宗教觀念に照して、私の行動が良いか、惡いかと云ふことを、常に忘れずに居るのであります。

宗教と學問が一致しないと云ふ說が盛にあるので、或はあなた方の內にも宗教と學問と云ふものは一致すべきものでない。宗教の云ふことは誤が多くて、段々學問を研究して見ると、宗教は取るに足らぬものだと云ふやうな說が可なり澤山あるのであります。

所が、私は色々な點から、この神と云ふものゝ實に尊敬すべく、恐るべきものであると云ふことを深く感じて、さうしてひとりでに私は有神論者になつたのであります。

人智の及ばざるもの

先づどう云ふ點からさう云ふことを考へたかと申しますと宇宙は洪大なものである。天は高いものである。天の高いと云ふことは、果してどれ程高いのか。我々が一生涯零を書いて居つても天の高さを示すことは出來ない。そこで先づ差當り近い所で、最も顯著なる天體としては、地球と太陽と月輪がある。此三者が各々力の關係を持つて、ちやんと一定の軌道を回轉して居る。是

だけは知つて居るけれども、其他にあるものも、無限に何處まであるか分らぬ位な空であつて、空の内に幾億の星座がある。此の星自身も矢張り相當な相互の關係を持つて居つて、回轉を續けて居つて、光を放つて居るのである。それは天文學が幾ら發達しても全部のことは分らぬ。太陽の距離は幾らあるかと云ふことは、光線の速さから觀測して分ると云ふ位なとで、もうそれで終であるので、迚もさう深い研究が付くものでないのであります。それから地球でもさうでせう。斯うやつて我々は安全に地球の皮の上に住まつて居るけれども、少し這入つて見れば、中は火である。火の車で表面だけが硬くなつて、其上に人間のやうなものが生れて來たと云ふことも、抑々甚だ不思議である。そんなことから段々疑つて考へて見ると、どうも學問の力などを以て、此宇宙の洪大な事柄を究明することは出來ないのであります。

洪大なる神の營み

極く卑近な地球の上の事柄例へば生産があり、或は草木がありますけれども、先づ一番私が心付いたのは斯う云ふ點である。私は札幌麥酒の專務をして居つたことがある。枕橋の煉瓦の工場

は、私が建築したのでありますが、其當時彼處で初めて麥酒を作り始めます時に、先づ大きな部屋を拵へて、其部屋に麥を蒔いて、其上にすつかり水を掛けて濕らせる。さうすると二三日經つと其麥が芽を出す。其芽を出した時に、其穀物のちよつと頭の所にヂアスターゼと言ふものが出來る。それは後に高峰先生がこのヂアスターゼを別に取分けることを研究して、タカヂアスターゼと云ふものを拵へた。高峰の字を取つて、タカヂアスターゼと云ふ消化藥にしたのであります。けれども、其麥が濕めるとヂアスターゼが出來、麥の皮から段々水分を吸收して行くと云ふと、水分の爲にヂアスターゼが溶けて、あの澱粉が、詰りヂアスターゼの爲に、全部砂糖に化する。この糖化された液が、穀物を育てる乳になるのである。ですから、麥一つでも左樣な靈妙な働を持つて居る。矢張り麥が小さい間は、自分で榮養を採る力が鈍いですから、その乳を飲んで、それから根を出す。根で榮養が攝れるやうになつてから、又芽を出すと云ふやうな働をする。殆ど生物と云ふものは、人間であらうが、穀物の一つであらうが、各々の天理に依つて支配されて生きて居ると云ふ事實がそこにある、さう研究して見ると、段々物がむづかしくなつて來る。浮塵子の如き空中を飛んで來る小さい蟲、あれでも矢張り飛んで行かうと云ふ一つの思想を持つて居

る。同時にあの中にも夫婦がある。相當に繁殖の器官を備へて居る。相當に矢張り臓器を持つて居る。簡單ではあるが、ちやんと備つて居つて、あの浮塵子のやうに飛んで居るが、其正體はどう云ふものかと云ふと、それは實に小さい。

私が此間病氣をしまして、甚だ尾籠な話だけれども、便をすつかり洗つて見ると、便の中に細い砂がある。其砂の塊が私の身體の禍をなすのであらうと云ふことから、始終それを研究して居るのですが、便を洗つた水の中に殘つて居る砂を、私は始終家人に命じて顯微鏡で見させるが、病人の自分も顯微鏡を見る。約二百倍にすると、私の腹の中から出て來た砂の中に、非常に足の長い馬のやうな黴菌が居る。それが砂の中を駈廻つて歩いて居る。

それから藻を取つて來て、それを二三日水に漬けて置いて、藻を切つて藻の中から出て來る水を斯うやつて見ると、中の蠶のやうな形をして足が四本づゝくつゝいた奴が無數にやつて來る。彼等も矢張り皆相當な考を以て中で遊んで居る。さうすると此小さいと云ふとも殆ど無限であつて、それは人間の力で以ては測ることは出來ない。さう云ふ風なことが、ちやんと皆一定の原則で支配されて居る。不意に出來ることぢやないので、神が創造した世界は、宇宙と云ふものに就

ては、大小となく皆ちやんと一定の原則を以て支配されて居る。さうなると最も恐るべきものは神だ。宇宙の創造の神である。

宇宙の支配所

然らば斯様な大きな宇宙であるから、此宇宙を全部支配する所の神は、人間の様に手足を備へた神様でござるとはどうしても考へられない。それは何處にどう云ふ風にあるか分らぬけれども全然人間の力を以て察することは出來ない所の高遠絶大なる威力である、斯う考へる。而して其絶大なる威力と云ふものが、どう云ふ働をして居るかと云ふと、惡いことをしたものにはそれは極端な刑罰を與へる、良いことをしたものには、又是は實に想像も出來ない程の思惠を與へると云ふことに、此宇宙は創造されて居つて、即ち一定の原則で以て支配され居る。決して我々が拜んだからと云つて、斯う云ふ奴が拜んで居るから、あれを能く助けてやらうと一々神様が御考へになつて、始末を付けるものぢやない。地球上に幾億と居る人間が、總てのことは、一定の定まつた規則に依つて支配されて居る。所謂周波的に春夏秋冬がある如く、人間界のことも矢張り進歩

する、退歩すると云ふことも皆神意の象徴であつて、矢張り一定の規則を持つて居る昔極く微弱な日取で居つた小僧である私が、今日斯うやつてあなた方に御目に掛つて御話をすると云ふことになつたのも、決して是は私一人で出來たのではない。人間と云ふものは、どうも一代では出來ないのであつて、矢張り先刻も申上げたやうに、一定の原則に依つて私の祖先がどうしても私なるものが出來るやうなことをして置いた、其結果である。斯う私は考へる。

神を恐れ敬ふ

そこで若し私が好い按配に本當に一生懸命に眞面目な道を歩んで、そうして誠の道を盡して生涯をし終るならば、必ず其恩惠と云ふものは、私の子にも、孫にも、曾孫にも及んで、決して一代で盡きるものでないと考へる。故に善事をなすに就ては、何處までも其恐ろしいことを能く悟つてするのでなければ、本當の善事は、心からは出來ない。極く薄つぺらなものになつちやいけない。是は惡事もさうです。惡事の報ひと云ふことも、僕は最初は神と云ふものは、何處までも洪大無邊な慈悲を持つて居られるものである。さうして惡いことをしても、一遍神樣に對して懺悔してさうして改心すれば、そこで罪障は消滅すると思つたが是は大なる間違で、最も猛烈な刑罰を人間に對して加へる。

而もそれは決して一世一代では清算が出來なくて、其禍は必ず子孫三代四代に及ぼすものである。それですから、非常に惡いことをする人の系統を考へると、決して是が一代で出來るものでないと云ふ場合が多いのである。それでありますから、さう云ふ觀念から僕は強く神に向つて厚く尊敬もし、同時に恐れもして、さうして平生の心懸をそれに依つて致して居るのであります。そこで先づ斯う云ふ風なことで、私の家なども好い按配に一家相當繁昌致して居るのも、皆是は祖先の賜物だと思つて、其恩は毎日家を出る時と、歸つた時と、必ず祖先に向つて禮拜することを忘れないやうにして居る。さう云ふ考になつたのも、畢竟私が今日まで段々年を取つて、所謂本當の人慾と云ふものが段段なくなつて來て、さうして本當の道を辿つて來た結果でもあらうと思ふけれども、左樣な觀念が非常に深くなつたのであります。

機械力の濫用

それでその所謂神意に依つて、世界の總べての事柄が動きつゝある。況してや日本などもさうである。今の現在の日本の發達、是等の原因も能く考へて見ると云ふと、皆此神意に基いたと思ふ方が宜いやうに感ぜられるのであります。學問なんと云ふものは、此宇宙の大なることに比べれば、それこそ大海の一滴のやうな事柄で、さう我々は深く學問の力を大きく見るのは誤だと思ふのであります。だからと云つて、學問を輕ずる意味ではありませぬ。

少し餘談になりますが、此間藤原銀次郎君が亞米利加から歸つて來て、亞米利加の不景氣は、如何にも不可解だと云ふ。盛に大なる機械をどんどん用ひて、立派な仕事をして居つて、さうして矢張り困つて居る。どう云ふ譯だか分りませぬと云ふ。それに對する私の結論は、要するに亞米利加が餘り大きな機械を十分利用し、それから水力を盛に使つて、人間の力を省く。所謂給金が段々高くなつて、人間が厄介になつて、之を直す爲に、機關を大きくして、水力を十分利用して、人間が要らないやうになるから、大なる機械、學問の發達と云ふことが、惡いことには行き過ぎて、結局人間力はなくても濟むやうなことになる。詰り、その根本の力は何處から得るかと云ふと、太陽が海の上をどん〳〵溫めて、蒸發させて其蒸發した水蒸氣が段々と陸上に吹寄せられて、陸の寒氣で解けて水になり、雨になつて降つて、それが川を流れて落ちて來る。それを拾ひ上げて電力にして、人間の力でやつた仕事を、水の力にさせてしまふと云ふことが盛になつて來たのである。それで今度は其力を利用するに就て、色色樣々な機械を工夫をして、紙抄きの機械などでは、二十四尺、二百四十吋も幅のある大きなやつが一分間に一千二百尺も抄いて居る。大變なものです。一臺の機械だけで日本の新聞に使ふものだけは間に合ふ。それを三人か四人で使ふと云ふことになる。さう云ふものが、盛に彼方此方に出來たならば、人間は澤山に要らないと云ふことは自然なことで、それは隨分困つたことです。餘りに人間が利口になり過ぎて、學問倒れがして、さうして唯所謂神祕を曝くと云ふやうな按配に研究が積んで來て、段々人間の働きが要らない、機械で濟むやうなことになつて來る。是ではどうしても非常な不景氣を惹起さゞるを得ない。

日本は最も好景氣

如何なる商賣でも事業でもどうも品が非常に餘つて、しようがないから、それを御互に爭つて

買らうと云ふことになれば、皆損をしてしまふ。ああ云ふことはしない方が宜い。今日ではどうもさう云ふ狀態になつて居ると、私は思ふのです。

藤原君が見て來た話を、私は雜誌や何かで見て能く知つて居るが、藤原君が見て來て、如何にも不思議だ。御聞きの通り何十億と云ふ殆ど世界の金を集めたやうな工合に一生懸命に金を集めて、亞米利加では殆ど金の中に這入つて居て、さうして不景氣に苦しんで居る。それですから、金が餘計溜れば國が繁昌すると云ふとが、嘘だと云ふことは第一亞米利加が實例を示して居る。今の所では先つ大體總ての狀態に於て日本が最も美ましいと云ふやうなことでせう。何處へ行つて見ても、勞働爭議が絶えずある。給金が安いからかと云ふとさうぢやない。給金は一時間幾らと云ふ。亞米利加では、休みなしにすると、職工が三交代で、一日に八時間宛勤める。先づ一時間が五十仙位には無論なるから、八時間四弗になる。日本の金にしますと、殆ど三倍になるのでありますから、十二圓になる。普通の職工が十二圓取るのですから、物の原價が安いやうでも、日本の金にすると可なり高いものになつてしまふ。それですから日本の品物は爲替安と云ふことの爲に、外國に輸出するのには樂である。紡績製品の如きでも、紙の如きでも、若し盛に關稅を高くして、邪魔をすると云ふことがなければ、何でも日本の製品が一番安く出來ると云ふやうな今好い都合にある。でありますから、頻りに彼方此方で關稅を高くして、日本品を入れないやうにしますけれども、それにも拘らず矢張りまだ日本の品物は大いに動いて行くと云ふのである。それは何の爲かと云ふと、賃銀が安いからである。賃銀の安いと云ふことは、爲替の爲だからである。即ち爲替が斯樣な狀態に相成ると云ふことは、金の輸出禁止の爲だ。それで日本の總ての事柄が此金の輸出を禁止して居る爲に、都合好くなつて居るのです。

圖の下落

今日本の爲替と云ふものが先づ三十弗、日本の百圓を亞米利加の金にすると三十弗にしかならぬ。而して其金の目方はどうかと云ふと、約四十九弗幾ら、先づ五十弗、端數を除いて勘定しますと、亞米利加の一弗と云ふものは、日本の金にすると二圓になるべき筈である。それが三分の一にしかならない。三十弗或は二十八弗と云ふことになつて、日本の金の値打は亞米利加の弗に比べると、馬鹿々々しく安いのである。何の爲に左樣に日本の金が安くされるやうなことが、何

處にあるんだと考へて見ると、頗る馬鹿々々しい。但し、今日に於ては弗の高いと云ふことは、即ち日本の紙幣が安いと云ふことは、日本の總ての貿易關係に就て非常に都合が好い。と云ふのは、向ふの人が何か日本に賣つても、それを金にすると馬鹿に高いものにつく。亞米利加では非常に安いものだと思ふやつが、日本人には非常に高くなる。だから賣るには都合が好くて、買ふには非常に不便なんでありますから、此爲替の安いと云ふことは、結構であります。それ故に曩頃私は金輸出解禁はいかぬと云ふことを、非常に強く主張した。それで犬養さんの內閣になつてから、其日に直ぐと金輸出再禁止をしたのであります。其金輸出再禁止の爲に、日本は先づ今日の繁昌を回復したのでありますが、それは申上げるまでもなく御承知の通りである。併しながら爲替なるものは、頗る變だと云ふことに、皆樣は御氣付きになりませぬか。百圓の金で亞米利加の五十弗に換へ得べきものが、五十弗で交換出來ない、それが三十弗以下になつて居ると云ふことは、馬鹿々々しいことだ。國の貨幣の價値をそんなに安く踏倒されることは、實に甚だ我々としては恥辱だと云はなければならぬ。甚だいま〳〵しい、不都合千萬な話である。併し是非さうなければならぬ理由がどつかにあるんであらう、斯う考へて見る。

爲替の下落は變な譯だ

抑々爲替の變動と云ふものは、貿易の關係から起る。亞米利加と日本の關係と云ふものは、亞米利加からどん〳〵品物が來ても、其金を滿足に拂ふことが出來ない。日本は金の輸出を禁止して居るから日本へ品物を賣つても、滿足に金が取れるかどうか分らないと云ふ此不安が、弗の高くなる關係を惹起して居る。然らば何時日本で外國から買つたものに對して、支拂不能に陷つた實績がありますか。いつ何時でも完全に支拂が出來る。それと今一つは、此日本の爲替と云ふものが、左樣に懸念せられるならば、大分そうやつては居るさうですけれども、向ふから例へば一億弗のものを日本が買つたならば、日本のものを向ふにも一億弗買はせる。賣るものと、買ふものと始終相撲を取らせて置くやうにやりさへすれば差支へない譯である。それが出來ると思ふ。所謂本當の爲替管理或は貿易管理、一歩進んで貿易管理と云ふやうなことにして巧く之を取扱へば、それは爲替の差なんと云ふやうなものを見る必要もないやうになるべき筈と思ふ。今日でもさう云ふ管理がなくても、此爲替と云ふものが、左樣に安くなる理窟は、全くないと思ふ。是は

其筋の當業者の心理狀態から起つて來るものであらうと思ふ。どうですか。

向ふの人が要求するだけの金はいつでも間違なくちやんと拂ふのである。拂へないやうな狀態であるならば、決して買はない。拂へるから買ふ、確かに向ふのやつに一弗なら一弗拂へる力を持つて居るものが買ふのに、爲替に差がある筈はない。それは是正しなければならぬ。商賣の取引、貿易上の關係に於て、此位愚劣な分らない話はない。僕はさう思ふ。ちやんと拂ふ力を持つて居ると思つて物を買ふ。それに向つて、御前の所の貨幣は安い。是位譯の分らない話はない。當り前だと思つてはいけない。議論したつて此位おかしな話はないと思ふ。

併し僕は此問題を餘り大きな聲では云へない。と云ふのは、斯樣な狀態に置く方が、日本の色々な貿易關係に都合が好い。都合が好いから、成るべくうつちやらかして置けと云ふ意味であります。此問題は、成る程大川はさう云ふことを云つたが、玆に一つの眞理があるかないか、あなた方も一つとつくり考へて戴きたい。どうしても今のやうな貿易關係からは、さう云ふことはない。又品物を買過ぎて困るやうならば、又品物を餘計向ふに賣付けるやうにしなければならぬ。現在露西亞などばさうでせう。今度一億五千萬弗で北鐵を買つた。それで其三分の一五千萬圓だ

け拂つて、後の一億何千萬圓と云ふものは品物でやる。さう云ふ譯でそこで加減をすれば、もう貿易の關係と云ふものは心配する必要はない。此貿易の關係と云ふものを、寧ろアジヤストすることが出來ないやうなれば、それは政治が惡いので、やり方が下手だと思ふ。

石油はなくともよい

日本人は外國から物を買はなくても、自國で必要である所のものは、皆自國で製作するだけの今日は科學知識が相當にある。大概なものは皆間に合ふ。間に合はないものはない。間に合はないものは油位です。是は大いに研究しなければならぬ。一朝何か事があつても、兎に角心配になるので、船を動かしたり、或は自動車を動かしたり、今の所自動車は陸上に於ては人間の力を大分補充して居る。此人間の力の元になる所のガソリン即ち油が日本に生產しないと云ふことを日本人は知らなければならない。之に對してはも少し我々は力を入れて研究をしなければならぬ。それは最も大切な問題になるやうに思はれる。

戰爭するには油がなければ迚もいかぬ。そんならば戰爭のあつた時に、いつでも困らないやう

に、不斷ガソリンをうんと貯藏して置けるべきものでもない。そこで之を段々能く考へると、ガソリンなどなくても行けると云ふ道がある。それは何であるかと云ふと、今のデイーゼルエンヂンです。デイーゼルエンヂンに豆粕油を入れる。それで豆の油をやりますと、非常に安く上る。トラックなどを動かして見ると、三分の一で濟む。ガソリンの三分の一で濟む。是は豆を搾つたあの豆粕の油、之に少しばかりのアルコールか或は揮發油をほんの少し、五パーセントか十パーセント混ぜてやれば宜い。私は一般に自動車に此豆粕で以て動力を起して來るデイーゼルエンヂンを付けて、ガソリンを全廢してしまふと云ふことが、油を生産しない國としては一番大切な問題だと思ふ。滿洲へ行けば、それこそ豆が盛に幾らでも出る。是が一番面白い重要な問題だと思つて居ります。

併し、どうもまだ左樣にそんなことまで考へて、心配をして呉れる人が少い。私は近頃研究しつゝあるところであります。大變面白い問題になりますが、自動車或はトラック、斯う云ふ風なものは、全くガソリンなしで濟む。もう一進歩んで軍艦まで行くやうに考へなくちやいけない。併し陸上で餘りガソリンを使はないやうになると、それは今度は又一朝事ある時には、軍艦のガソリン位は、貯藏で持つかも知れない。そんなことも考へて居る。大變惡い事を心配して居るやうでありますけれども、十分可能性があり、而して經濟的でもある。日本人の人間の力を自動車が補充して居る。あれが三分の一の費用で、濟むならば、大變國家的に經濟である。どうしても私共はそれに努力しなければならぬと思つて、研究の歩を進めつゝある所であります。

あれは面白いことには、自動車は自分で廻りながら電氣を起して、その電氣で以てガソリンが爆發するやうになつて居る。所が今度のデイーゼルエンヂンと云ふのは、電氣は使はない。電氣を起さないで、シリンダーが爆發をして廻つて行つて、それから上に戻る時分に滴れて來る油を爆發させるのに、壓迫の爲にぎゆつと締付け、壓迫されるので、自分で爆發を惹起するので、今のデイーゼルエンヂンと云ふものは大變都合好くなつて居る。從つて、飛行機などに使つても、電氣のワイヤなどが色々引いてあつて、それが故障を起す原因になつて居るが、デイーゼルには其懸念がないのです。

唯、今の所では少し圖體が大きくて重い。そんなことを段々巧くやるやうに考へなければいかぬと思つて、今研究して居るのです。

それから私の觀念論から申上げて、此日本の今日までの發達と云ふものは、決して偶然ぢやない。是は神の思召から來たことであらうと痛感するのであります。それはどう云ふことである。と云ふと、先づ日本が明治の維新、王政に復古したと云ふことが、偉い出來事でありますけれども、之もどうも偶然ぢやないので矢張り長い間の時の經驗から自然に起つて來たことである。

五ケ條の御誓文

明治元年の三月に、明治大帝は、五ケ條の御誓文と云ふものを御發表になつた。讀んで見て、是が日本の發達の原因だと思ふのは、其内に、萬機は公論に決すると云ふことである。國民一般の衆智を集めて、公論に決すると云ふ深い思召があつたことゝ、それから今一つは廣く知識を世界に求めて、大いに皇基を振起すべし。此時から日本は知識を世界に集めて、さうして此國の力を強くせねばならぬ、即ち皇基と書いてありますが、是は詰り皇室の御稜威を盛に強くすると云ふ意味である。そこで玆にどうしても廣く會議を興して萬機公論に決する、知識を廣く世界に求めてさうして皇基を振起すると云ふことが、其五ケ條の御誓文の内にあるのでありますけれども是が偉いことであると云ふことを一つ考へなくちやならぬ。

神祕的に偉い日本人

それはどうかと云ふと、私は支那などを歩いて見て、どうして支那の大國が、それこそ東洋の文明の土臺であつた所の支那が、斯樣に今日の如き遲れた狀態に居つて、小さい島の日本が斯樣に文明が發達をしたと云ふことは、一體どう云ふことであるかと云ふことを考へて見る。日本も明治大帝の如き御方を戴き、それから今の伊藤公初め當時の偉い豪傑を持つて居つて、其人達が働いて呉れて、此日本の小さい國が先立つて今日の文明を持來した。若し是が支那と同じやうに自尊主義であつて、獨り偉がつて居つて、外國人を疎外するやうな氣分を持つて居つたならば、さうして日本が支那と同じやうな狀態で今日まであつたならばどうであつたらうか。先づエチオピヤと伊太利との紛擾のことに之を思ひ合せて見て、日本も支那もあゝ云ふ目に必ず遭つたに相違ないと思ふ。畢竟日本が先立つて大いに進んだからだ。殊に日本人は所謂武人である。祖先以來日本人には所謂武人の血が流れて居るのでありまして、一種變つた其方面に對する力を有して

居るので、是は所謂神祕的に偉いのであります。東洋即ち亞細亞全體を白晳人種の爲に支配されてしまふと云ふやうな、實に情ない狀況に陷るのを免れて居るのは何かと云ふと、日本人が早く進んで、兎に角是だけの文明をこの小さい國ながら玆に建設した結果であります。

西洋文明衰へ東洋文明興る

今日に於ては亞米利加から押して來るには、玆に四千哩と云ふ距離がある。此距離と云ふものが、東洋を守るのである。如何に發達しても、是だけの大距離を押して來て、日本に對して今日では大事を擧げることは出來ない。是が若し日本が支那と同じであつたならば、日本は支那と一緒にどんな目に遭ふか分らぬのである。列國の申合せの爲にすつかり舐められてしまふに決まつて居る。是は神の思召に依つて、世界は常に春夏秋冬の定まれる氣候の變化がある如く、又同じやうな道理に依つて支配されて、是まで長い間白晳人種の歐羅巴は大いに全盛をなして、今日の文明を築上げて光つて居るのでありますけれども、もうそれで彼等は殆ど全盛を極めて、退嬰に這入るのである。即ち夏が過ぎて秋に這入るやうな工合に、所謂サイクルと云ふものに依つて、神の行動が出來て居つて、歐羅巴の文明は段々衰へて、文明は玆に所謂東漸して、我々の方に移つて來べき氣運にあると思ふ。其先驅者たるべく日本の文明が先きに進んで居るのであると思ふ。

三國干渉の回顧

今日のエチオピヤの事態を能く氣を付けて見ますと、玆に私は日本が日清戰爭をして偉い苦心をして戰爭に勝つて李鴻章を馬關まで呼寄せて、彼處で伊藤公が相談して、到頭遼東半島を日本に割讓させるやうに相成つた。それで其事が決するや否や、露西亞と佛蘭西と獨逸の三國の公使が相談をして、之を支那に返せ若し大陸に日本が手をつける即ち足を掛けると云ふことであれば大いに自分達も考へねばならぬ。それは日本の爲にならぬから、之を返すことにしろと云ふ。何だか知らぬけれども、頗る失禮極まる忠告が這入つて來た。そこで當時非常な大事件でありますから、先づ以て海軍の方に對して相談をし、又陸軍と十分打合せをして見た所が、どうも此三國の東洋艦隊に對して我我は敵對することは出來ないからと云ふことに歸着しましたので、遂に涙を呑んで、遼東半島を又再び支那に返して僅かに金を二億圓か取つて、あの問題は終つて居るの

であります。そこで段々露西亞を始め歐米が支那に來て蔓つて來る。日本の小さい島に居つて、少しも手足を延ばすことが出來ないと云ふ狀態で居れば、果して、日本と云ふものは、世界の地圖の上に名を留めて行くことが出來るか否や疑はしい。

神の御加護

それから大いに國の軍備を充實せしめると云ふことに付て盡力されたのが兒玉大將である。要するに日露戰爭は兒玉大將あつて初めて出來たのであります。それから日清戰爭の時には、川上操六と云ふ偉い方があつて、此御方の爲にあれが出來た。日露戰爭の時には兒玉さんがあつて出來た。一人の豪傑があつて殆ど世界的な大騷動に對して斯の如き大なる役割をすると云ふことが玆に出來、左樣な人が生れて來たと云ふことも、是亦本當に所謂不思議であつて是は神の思召に基いて居るものだと考へるのが、本當である。いやどうも日清戰爭の時には、定遠、鎭遠と云ふ二つの大きな船があつて、是が七千噸、今から見ると何でもないが、それが非常に恐ろしかつた。どうも此二艘の大きな船がある爲に、日清戰爭は危ないと云つて、非常に氣遣つたのであります。

けれども、其上に乘つて居つて働く人間の力、例へば日本の大將の樺山大將は西京丸に乘つて居る極く脚の遲い木造船で、下の方に少し鐵板を張つてあるが上は全部甲板に至る迄木造、後に上海航路に日本郵船で使つて居て、それに乘つて僕は度々上海に行つたが、あんな小さい木造の西京丸に乘つて居て、海軍の大きな戰爭に能く樺山さんが無事であつたと云ふとは、本當に不思議だ。その事を話すとなあにそんな船に大將が乘つて居るとは思はぬから狙はなかつたと云ふ。

それから支那の方の定遠、鎭遠などの其時分の寫眞を見ると、デツキの上一杯に砂袋を積上げて、其間から首を出してやつて居る。デツキに砂袋を積んで、其砂袋の蔭に隱れて戰爭をすると云ふやうな氣分ぢや、戰はどうしても出來ない。其時の向ふの大將は丁汝昌と云ふ大提督で、そこで愈々日本海の海戰で負けて國に歸つて、到頭其男は毒を飲んで自殺をしました。今の支那人なら自殺などしない。丁汝昌は今から考へると感心なことです。支那の方の氣分が衰へて居るから、丁汝昌は負けたに相違ない。日本海戰の時には砂袋の蔭に隱れて居つたに違ひない。負けて愈々となつたならば、到頭自分は自殺したと云ふことを以て、大いに彼には感心してやつて宜いと思つて居るやうな譯です。それに反して、上海に行く西京丸に乘る度に、樺山大將のことを思

出して、偉い人だと思つた。

君の爲めに命を捧ぐ

日本の必勝の氣分はどうしてあるんだと云ふと、矢張り薩長が幕府に壓迫されて、心膽を練つた結果であつて、それから出來た海軍が強いのである。それだから鹿兒島人を惡く云ふが、一時跋扈して困つた御連中ではあつたけれども、併し此薩長があつて、あの維新と云ふものが出來た。それで日本中に非常な流血の慘事を惹き起さないで、無造作に此改造が出來たのみならず、諸大名をして全部只であれだけの領土を還附させちやつた。

外國ならば決して出來ないことで、兎に角あの大名連中と云ふものが、相當な領土を要求するか何かして、居るべき筈だつたけれども、そんな主張をする程の强味はなかつた。大名と云ふものは、皆弱くなつちやつて、昔はそれこそ戰爭の强いやつが、皆殿樣になつたのだけれども、三百年の太平が續いて、刀を拔いたのを見るともう慓え上ると云ふやうに皆弱くなつた。刀を拔くと云ふことを、皆非常に恐がつた。是が其極度に達した時に、薩長が立つてやつた爲に、あの維

新と云ふものは、無造作に出來た。さう云ふ風な譯である。さうして今日の强さは何處にあるかと云ふと、矢張り一天萬乘の君の爲には生命を捧げて進む。それを以て自分の名譽とすると云ふ國民の氣風と云ふものが日本の强さをなして居る。さうなければ日本は全く一瓦めにされてしまふべきものである。それは影にも形にも見えない人間の氣分でありますけれども、其氣分が極めて大切なものである。

日本の憲法

それで日本の憲法に於ては天皇は神聖にして侵すべからず、神であるとしてある。天皇のことゝ云ふものを、彼是論議したり、何かしたりすべきものでない。色々な思想や學問の上から、唯無暗に道理などを說いて、機關說などを唱ふべき筈のものではない。日本の憲法其ものは國體を基にして、さうして憲法の編纂をしろと云ふことが、明治大帝の御命令であつた。此間も金子堅太郎さんと私は三四時間ばかり色々な御話をして見たけれども、國體と云ふことは、詰り日本の國が、約三千幾年一系の君主を戴いて居ると云ふこと、それに對して我我は絕對の忠誠を捧げる

と云ふことが即ち國體であるのである。斯様な國體と云ふものは、よそにはないので、國體と云ふ字が全體英語などにない。何處の國にも、國體と云ふものを表示するやうな言葉がないと云つて居ました。それで之を基として出來て居る憲法である。其憲法の條章の上から云つて、機關とか何とかと云ふことを考ふべきものぢやないのだと云つて居られた。詰り之も私見に屬するけれども、法律などと云ふものは、其國民に向つて最も効果の十分であり、必要である所の文字が、即ち其國の法律をなすべきものである。之を理窟の上から彼是云ふのではないので、其國情に最も適切なる條章を設けて、初めて法律と云ふものは成立つのである。法律なんと云ふものは、私は法律家ぢやないけれども、決して萬年變らざる理窟ではない。例へば數字の上から云へば、二と二は四である。是は何萬年經つても變りやしないけれども、法律の權利や義務と云ふものは、時の情勢に應じて變化するものである。例へば、維新時分の權利とか義務と云ふものは、もう今日では大いに其意義を異にして居ると云ふ風に、不變な權利とか義務と云ふものは、實在しないものである。其國の情勢に應じて、最も必要であると云ふ意義に於て定められたものが、其時の權利義務である。斯う云ふものであつて、定まつた理窟はないものであると私は此問題を解決して行きたいと思つて居る。自分は其積りで總てのものを見て居るけれども、それでどうも差支へないやうである。で此權利だとか、義務だとか云ふものがあるやうな氣分で、色々なことを論ずる。さうして國體其ものを顧みない人達が、今のやうな機關說などを述べる。どうしても左様なことは、極力排斥してしまはなければならぬことだと思ふのであります。そこで之を排斥すると云つても、大體此事柄を論ずるのが惡いと思ふ。もう既に其事を彼是議論する、議論攻めにすると云ふことがいけない絕對に止めなければいかぬ。

非常時ではない

尙ほ忘れずにも一つ申上げたいことは、世間では非常時、非常時と云ふが、是は非常時ぢやないと私は反對を申上げる。斯様な狀態に置かれまして、さうしてもう我々は日夜孜々として外國に對抗することを始終忘れず研究して居る。それは何かと云ふと、第一は軍備に於て、どうしても何時彼等がどう云ふ手段を講じて攻めて來るかと云ふ所謂攻防の力の算用を完全にして、どうしても大丈夫だ、いつでも勝味があると云ふ立場にあるに非ずんば、此小さい國で以て、東洋の

覇者たる位地を保つことは出來ないものである、少し立遲れすれば直ぐ侮られます。でありますから、左樣な悲壯な立場に陷らないやうにやるには、今日が當り前だと思はなければいけない。此位なことをするのは當り前であつて、決して非常時ぢやないのだ。即ち常の事だと云ふ考を以て我々は之に當るべきであつて、非常時と云ふものは、或る時期を過ぎれば、止めてしまふのが非常時だ。是は止められない。何年續くか分らぬけれども、兎に角、是こそ永久的な考を以て此位地を保つて行かなければならぬ。それに付て常時とするのは宜いけれども、此國の經濟をどうするかと云ふことが、續いて起る問題である。

必要な事業には補助を

先づ第一に問題が絶對必要であるかどうかと云ふことを考へて、若し絶對必要な事柄であれば、例へばどれ程の借金を質に置いても、やらざるべからずである。其方の必要があるかないかと云ふことの研究を疎かにして、唯どうも赤字公債云々と云ふことを深く論ずるのはまだ今日の場合適當なことでないと思ふ。で先づ例へばですな、飛行機の研究がまだ足りない。愈々本當に戰を始めたならば、一番大切なものは、空中の防備であらうと思ふ。どうもそれは大分陸軍でも、海軍でも、其點に付ては、まだ大いに心配して居られるであらうと思ふ。今日の狀態では安心が出來ないと思ふ。

けれども私は飛行機の製造もして居るし、それから飛行機の運用に付ては、飛行機會社の重役も致して居る。色々研究して居るけれども、どうしても商賣にならぬ。飛行機と云ふものは、商賣的に發達させて置いて、それを軍用に使ふと云ふことが出來るやうなものであるとすると、此問題の解決は樂ですけれども、迚も商賣にならぬ事柄である。矢張り飛行機の事業と云ふものは國家が大いに補助しなければならぬ程度であります。相當に高い料金を取つても、それでもどうも算盤が取れない。飛行機が一杯人を乘せて歩いても、それでまだ勘定に合はないと云ふのは、飛行機と云ふものゝ壽命が短い。航空輸送會社の相當の飛行機でも、六百時間で壽命が盡きたとして居つたものであります。所で六百時間とすると、一つの飛行機に例へば十二萬圓掛るとすると、十二萬圓を六百時間で割つた勘定になるので、それを償却して行くと、迚も勘定に合はないのであります。それに合ふやうな勘定を取つたら、誰も乘つて呉れる人はないと云ふやうな譯で

ありますから、此補助と云ふものを餘程考へて呉れなければならぬのであります。そんならば澤山の飛行機を用意して置いて、其儘使はずに置ければよいが、今日ではどん〳〵新しい型が出來て來て、折角良い按配にすつかり揃つて來たと思ふ時分に、それは舊式で駄目だと云ふやうなことにもなるのでありまして、隨分むづかしい問題であります。それから乘る人も矢張り盛に多くしなくちやならぬので、今日でも出來るだけして居りますけれども、まだ空中防備に付ては非常に日本はまだ設備が不完全であるやうであります。

軍事費は惜まぬ

何れそんなことも研究されて、豫算が出て來るでありませうけれども、先づ以て軍事上に對しては、絶對必要な事柄は、先づ無駄のないやうに十分に研究して貰つて、さうして是非安心して居られるやうにしなければならぬと思ふのであります。故に此非常時と云ふのは、非常時でなくして、兎に角當分の間、繼續すべきことで、そこで軍備さへ本當に完全であれば、日本は威力を逞うして、東洋で仕事が出來る。之を怠つたならば駄目であるから、大決心をして行かなくちやならぬ。此爲に大いなる金を使ふと云ふことは、經濟學者が言ふと、是は一番の無駄な費用である。人間が物を濫費する上に於て戰爭位愚なものはないと云ふことを、昔は經濟學者が皆云つて居るけれども、併し日本に於てはさうぢやない。軍費と云ふものゝ爲に、日本は膨脹して行く。それだから國運進展の爲には、最も有益なる最も利益である所の費用であるから、此軍備の爲に金を惜むことはいかぬと云ふ意見を我々は持ちたいと思ふ。それで唯此必要なる軍費を要する爲に、或る方面の人が盛に金を儲ける。或る方面の人は唯取られるばかりで詰らないと云ふやうなことが起つて來る。さう云ふいやなことのないやうに、本當に必要なる方面に最も公平に其事が行亘るやうでなければいかぬと思ふ。それが最も注意すべき要點であります。併ながら軍備の爲に金を使はさぬ。矢鱈使はさぬと云ふことはいかぬ。必要なることを先づ考へて、それに向つて必要なる金はどうも皆踏張つて出す方が宜いと云ふやうに、我々は輿論と云ふものをそれに持つて行つて、力を付ける必要があると考へて居る。

仕事をする爲めのインフレは惡くない

それからインフレーションと云ふことでありますが、全體此インフレーションと云ふことは、いやな字ですな。何か知らぬけれども、非常な無理なことをして、さうして唯無理に金を出すのだと云ふことで、而も無いやつが無理に借金をして金を搾り出すと云ふやうなことに考へられ、インフレの文字が、全體甚だ面白くない。インフレーションと云ふ字は、膨脹すると云ふ文字である。本來膨脹と云ふ字が、通貨膨脹と云ふ意味に用ひられて來たのでありますけれども、現今何だかどうも一種非常な無理があるやうな意味に聞える。僕は此インフレーションなるものを實行する手段として、之を軍備に依つてインフレーションを實行すると云ふことにすれば、玆に大變に良い解決になる譯である。インフレーションをやつて、詰り通貨を段々膨脹させる。そこで總ての經濟狀態に於て、色々な金を要する所の所謂商取引或は物品の生產其他のことに付て、實際必要なる金を出す。所で戰爭とか軍備と云ふものがなく、平生の通りならば、或る一定の量がちやんと定まつて居つて、さう別に金の必要を喚起しないが、軍備を擴擴すると云ふとの爲に、兵隊を餘計養つたり、或は大砲を拵へる、種々樣々な道具を拵へて、金を使ふのでありますから此金を使ふのは、どう云ふことだと云ふと、それだけの勞力を要求すると云ふ方面から觀察をして行くのが一番宜いと思ふ。例へば人間の給金が一日二圓であると假に定めて、それで十億の軍備を要求すると云ふことは、五億の人間を二圓で雇ふのだと云ふ意味に之を解釋して行く。そうすると云ふと、此勞働賃銀を支拂ふ爲に金が餘計出て行く。さうして新なる品物を作り出すのでありますから、インフレーションと云つても、唯無用に、同じ狀態にある所の商賣界に遽に急に餘計な金を投ずるのではありませぬ。商賣が同じ所へ持つて行つて、餘計な金を投ずれば、物價が騰貴したり何かする。さうぢやない。此經濟狀態と云ふものは變化して勞働の要求を盛にして物體が餘計に生產されるのであります。其生產をする爲に要する所の金を出すのでありまして、唯之を本當に漠然としたインフレと見るのは間違ひだ必要なる方面に必要なる事業を起す爲に、必要なる勞働を要求する爲に、玆に金を出すと云ふことは、インフレぢやないのだ。其間に一つ誤解があると思ふ。

良いインフレ、惡いインフレ

故にさう云ふ場合で、實際餘計な人を使つて、餘計な仕事をして、餘計な品物を拵へ出して、

さうして即ちそれが軍備となり、色々なものになりませうけれども、さう云ふ所に品物を生み出す爲に要する所の金を出してやるのでありますから、唯之をインフレーションと見るんぢやいかぬ。あれは考へるとインフレーションにも色々な種類がある、是は最もたちの良いインフレで、必要に應じてやるインフレでありますから、それが爲に、幾らか世間の景氣は好くなります。それだけ勞力を要求して金を出すのでありますから、世間の景氣は多少好くなりますけれども、それが爲に大いに物價が騰貴すると云ふ結果は齎さぬと思ふのである。金を要するだけの對象物が出て來るのであつて、從來居據はつて居る所に、それだけの金を別に投出すならば、立所に物價の騰貴を惹起すが、今のやうに軍備の關係に於てインフレをやる。即ち金を出すと云ふことは、それだけの事柄が餘計出來る爲に要求する所の金でありまして、物價の騰貴は割に引起さぬと云ふことに、どうもなるべき筋であると私は考へる。此僕の觀察は間違ひないと思ふ。

そこでインフレーションにも、どうも本當に必要なるインフレーションと、それから特別な理由に依つてそこに投出される所のインフレーションと、二種類ある。今我々が現在見て居る所のインフレーションなるものは、最もたちの良いインフレーション、斯う僕は觀察して宜いと思ふ。

從つて此インフレーションと云ふものは、金を使ふ割合に物價の騰貴を惹起して行かない。まるで新しい方面に新しい仕事をする爲に使はれると云ふのでありますから、それが自然に段々流れ亘つて、全體に於て好景氣を惹起すと云ふことはありますけれども、遽に物價を騰貴せしめて、それが爲に彼方にも此方にも不公平なる所の幸不幸が起ると云ふことはないと考へて居る譯であります。

金を後楯にしない通貨制度

そこで最後に僕は此通貨の問題を此頃色々考へて居る。通貨と云ふものは成る程今世界的に金ばかりを目標として、金が多いから、少いからと云ふことに依つて、其國の通貨の狀態が健全であり、不健全であると云ふことを、頻りに考へて居るが、是は非常なナローマインドなやつで、極く消極的な考であつて、それは間違ひである。通貨と云ふものは、も少し大いなる意味に於て考察すべきものである。そこで極く實例から申してもあなた方に金貨を千圓やるから御持ちなさいと云ふのと、それから百圓札を十枚御持ちなさいと云ふのと、どつちが氣持が良いか。我々は

決して金貨を貰ふのを喜ぶと云ふ譯でない。却つて厄介だ。引換に行かなければならぬ。紙幣の方は、即ち申さばあれは、國家の信用が基礎で出來て居るやうなものである。日本銀行と云ふものは株式會社であるけれども、併し其後ろには日本政府がちやんと後楯になつて居る。日本政府に依つて支持されてゐる所の銀行であると思ふ。それ故にあの札が左樣に威力を持つて通用して居る。一時は十億の準備を致して、十億の紙幣を出して居つたけれども、考へて見ると非常に愚な話で、今日でも何でも五億足らずしかないでせう。近頃のことは聞きませぬが、一時からは、先づ半分以下に減つて居るけれども、ちつとも實際に差支へない。それを思ふと、通貨の性質を大いに考へなくちやならぬ。

是は僕はどうしても此通貨と云ふものは、金を後楯にしない。金を見返りにしないで政府の信用に依つて、政府の信用だけで十分行けるものだと思ふのであります。

金て苦勞するのは愚だ

そこでさうなると云ふと、今度は世界中にさう云ふことが考へられるやうになつて來る。さう云ふことが世界中に考へられるやうになると、今度は金と云ふものは、そんなに尊いものぢやないと云ふやうになる。却つて鐵より役に立たないと云ふことになる。先づ是は自然のテンデンシーである。でありますから。此間土方さんと色々話をしたが、土方さんも僕と同じやうに、金と云ふものゝ前途に對しては非常に疑を持つて居る。今はつきりどうなると云ふことは云へぬけれども、金と云ふものに對しての必要なる威力と云ふものは、段々消耗しつつある。また然う行くものであると云ふ考を持つて居られるやうであります。さうあつて欲しいと思ふ。殊に英國の南阿みたいに盛に自國で以て金をどん〳〵掘出すやつと、自分の領土内に金が出ないやつと、其間に金と云ふものゝ働き次第に依つて、非常に不公平なことに相成る。昨今日本では北海道から出る、それから朝鮮からも出ると云ふので、そんなに他を羨まぬやうであるかも知れませぬが、容易く金を掘出して居る英國の南阿の金山みたいなものを思ふと、是は餘程考へ物である。亞米利加は御承知の通り澤山の金を擁して居つて、自分の國は不景氣で惱んで居ると云ふやうなことを考へ合せると、是は金の問題も餘程面白いのであります。あんなものを目的にしないで、我々の仕事を巧くして行けば、洵に結構ぢやありませぬか。僕はさう思つて居る。

無駄は文明の進歩だ

それからもう一つ。此世の中に無駄とそれから無駄でないと云ふことの間の問題がある。若し無駄だとすると、贅澤と無駄とは一體區別はどう云ふ所で付けるのだらうか。無駄と云へば、我々が木綿でも宜いのに、斯うやつて、毛織の洋服を着ると云ふことも無駄と云ふことになる。牛肉を食はなくても生きて居られるのに、牛肉を食ふのは無駄と云ふことになる。

或ひは、こゝに山田忍三君が居るが、デパートなども、あれが東京にデパートが十ケ所か二十所あると、東京中の小賣店は全部いらない。そうすると東京中の小賣店と云ふものは、皆無駄と云つたらばどうなる。そこで無駄と必要の區別は殆どないのであります。皆が着物も羅紗の着物を着て、良い靴を履いて居る方が宜い。大廈高樓を築いて立派な椅子に腰掛けて居る方が宜い。是が即ち進歩だ。無駄だけれども進歩だ。世の中で無駄を餘計するやつが、餘計進歩して居るのだ。無駄と進歩はいつでも密接な關係を持つて居る。御笑ひになるけれども、本當に心から笑ふ事柄ぢやありませぬ。眞理は……あの無駄を併し所謂害をなさぬ範圍に於てやると云ふことにある。例へば、最も無駄の内の一番甚しいのは、藝者の如きものである。あれはなきもがなであると思ふ。我々が寄つて宴會をやる。色々御馳走や何かの費用と、それから藝者の費用とは、惡くすると藝者の費用の方が多い。何をするかと云ふと、奇麗な着物を着て、さうして御酌をするだけ、非常な無駄だと思ひます。故に無駄だから、なしにしてやらうと思ふとどうも面白くない。それですから、是もどうも或は無駄ぢやないかも知れない。

特に著しい例は、東京中の無駄と云ふのは、あの一軒一軒皆店を出して、さうして呉服屋さんが少しばかりのものを竝べて、兩國の百本松で鯉を釣るやうな按配に御客が這入つて來て引掛るのを待つて居るが、是が最も無駄な實は親玉だと思ふ。此無駄と云ふものが、あゝ云ふ風に澤山あるのも、矢張り都會の飾りですな。さう考へるとどうも無駄と云ふものは、是は無駄と稱すべきものではなくして、矢張り飾りとして必要である。斯樣な無駄を多く盛にして行くと云ふのが即ち文明だと云ふ意味に解釋した方が宜いと思つて、無駄と必要論の意見を皆樣に伺つたのです。

（完）

昭和十年十二月十二日印刷
昭和十年十二月十六日發行

現時の世相に對する雜感

定價二十錢

編輯兼發行人　神原周平
東京日本橋本石町三丁目二

印刷人　本間十三郎
東京市牛込區矢來町三十六

經濟倶樂部講演
—(107)—

不許複製

發賣所
東京日本橋本石町三丁目二
東洋經濟出版部
振替口座東京六五一八番

東京＝清揚社印刷＝牛込

355
1214